留萌支方管内　増毛町

2．武好駅逓所資料

増毛山道の会

'96.1.5 文書館

昭和参年四月

㊇A7-1-269 道内里程表原本　　道路課

札幌・留萌間　ノニ　準地方費道 札幌留萌線

	地名	里程 里	町	間	累計 里	町	間	メートル程 粁		累計 粁		
留	留　萌	0	0	0	0	0	0		0		0	元　標
萌	禮　受		23	19		23	19	2	544	2	544	
町	町　界		23	49	1	11	08	2	598	5	142	
	阿　分		12	54	1	24	02	1	407	6	549	
増	舍　熊	1	02	19	2	26	21	4	180	10	719	町村道 分　岐
	箸　別		19	47	3	10	08	2	158	12	887	
毛	増　毛		27	48	4	01	56	3	033	15	920	元　標
	別　刈		32	11	4	34	07	3	511	19	431	準増毛 分岐
町	武好駅逓	2	14	38	7	12	45	9	451	28	882	町村道 分岐
	武好橋		19	18	7	32	03	2	105	30	987	
	岩　尾	1	17	42	9	13	45	5	858	36	845	
	ケマフール		33	46	10	11	31	3	684	40	529	
	雄　冬		19	36	10	31	07	2	138	42	667	石狩・留萌 支庁界

因にこの旧山道には一つの駅逓があった。

武好の駅逓がそれであって、幕幕時代に「休み所」と称して建てられたものである。

従って駅舎は明治21年頃には、永年の風雪に大破して無住となり、見る影もない野晒の姿となっていたという。

この駅逓にまつわる惨劇は、当時世間を驚かし芝居にまで仕組まれ、古老達のよく知っている事であるが、述べるに忍びないものがあるので割愛したい。

武好駅逓は明治20年に入り、旧場所から少し上、すなわち天狗岳の真下別刈の「ポンナイ」が登山口となる三里十八丁の処に新駅舎が建てられた。

この駅舎は後年建替が行われた際、積雪に耐える様、床下に脚柱を取り付けた高床式がとられ、三十坪の平家建てながら、間口が広く土間には外より筧が引かれていて、当時駅逓の建物として珍らしく、特殊な施工がなされていたという。

この駅逓について、元札幌北大の伊藤秀五郎教授が昭和五年十月号の「北の山」山岳誌に「雄冬山附近の山道と漁村風景」と題し次の様に述べている。

「その駅逓というは、増毛から雄冬に通ずる山道のちょうど中ごろに、冬には深い雪に埋れ、夏ならば輝く熊笹の波につゝまれて、ぽつんと一つ淋しく建っている」。

「増毛の先の別川という漁村から、なだらかな草地の上にうねうねとつけられた山道を二里ばかり登った山の中の軒屋だ」

地形図に載っている武好橋から先の増毛道というのは今は深い熊笹に蔽はれた跡方もない全くの廃道で雄冬や岩尻の村人達が増毛に通うのは橋から直ぐ海岸の方に下りて行く道だ

北の山～伊藤志五郎

1997.12 留萌の高橋明雄氏より伊達 東氏へ送付資料

雄冬山附近の山道と漁村風景

1

その武好(ブヨシ)驛遞といふのは、増毛(マシケ)から雄冬(ヲフユ)に通ずる山道のちようど中ごろに、冬には深い雪に埋れ、夏ならば輝く熊笹の波につつまれて、ぽつねんと一つ淋しく建つてゐる増毛の先の別刈といふ漁村から、なだらかな草地の丘の上に、うねうねとつけられた山道を二里ばかり登つた山の中の一軒屋だ。地形圖に載つてゐる武好橋から先の増毛山道といふのは、いまは深い熊笹に蔽はれた跡方もない全くの廢道で、雄冬や岩尾の村人達が増毛に通ふのは、橋から直ぐ海岸の方に下りて行く道だ。

しかし、道はあつても人の往來は極めて尠い。雄冬と増毛から毎日一回、遞送人がこの驛遞で落ち合つて、郵便物を交換して歸るといふ昔ながらのしきたりを反覆してゐるほかは、たまたま増毛の町に用足しに出た村人が立寄るくらゐのものである。泊りの客となれば尙更だ。山路の夜に迫られて、泊ることを餘儀なくさせられた貧しい行商人か、落魄した旅藝人か、さもなくば私達のやうな氣まぐれな旅行者が、時たま薄つぺらな手帖の旅客名簿に某年某月と鉛筆の跡を殘して行くばかりである。そして、い

まだに文明的な交通網から取殘された、靜かといふよりは寧ろ寂しいその山路と、しつくり調和した昔造りの驛遞の建物は、駄馬の脊をかりて、驛遞から驛遞へと泊つて行つた北海道の昔の旅の風習などを、おのづから想ひ出させる。恰も僻陬な山奥の寒村に傳へ遺された傳說や民話のやうに、そこに釀し出されたひとつの氣分といふものは、時に旅行者のこころを懷古的にするのであつた。それは、さなくとも旅に出て感じ易い旅人の單なる感傷のみではない。家運の衰微した大家の屋敷跡の草むした藪蔭などに、ふとそのむかしの遺影を感じるやうに、さびれ果てた漁村や、廢れゆく峠路の驛遞などに、わづかに遺されてゐる北海道の昔の姿に、人間の本能的にもつてゐる考古的な興味などを牽かれるからであらう。

それにこの驛遞の主人（あるじ）といふのが、山ずきな中老の獵師で、たつた一人で暮してゐるのが尙更よかつた。もつとも一昨年彼は永年住みなれた驛遞をすてて村に下りて了ひ、その後を代りの男がやつてゐて、昨年の冬に行つた時には建物などもひどく雪にひしがれてはゐたが、しかしとにかくそれは、雄冬から石狩河口までの海岸を起伏する幾つかの山道と、その邊傍（あたり）の漁村風景を愛するものの試みる山旅にも、或ひはまた、四五日の手輕な暑寒別（ショカンベツ）山塊の山歩きにも、最初の夜を過すべきただ一つの旅舍なのである。

2

私がはじめてこの驛遞を訪れたのは、大正十二年の五月であつた。サンマースキーを用ひる最初の試みとして、雄冬山から暑寒別岳へ續く山稜を選んだ時のことである。

増毛を出た日は中途から雨になつて、驛遞についた頃にはびしよ濡れになつてゐた。しかし、天狗山の山裾の、やゝ見晴しのきく尾根の殘雪に、古くさく建つてゐるその驛遞を、春雨の煙る中に眺めた最初から、私は莫迦にすきになつた。それ以來私はたびたびここを訪れるやうになつた。とりたてて驛遞のあたりの風景が奇に富んでゐる譯ではなく、むしろ平凡な景色に過ぎないけれども、私はここの何處となく落ちついた氣分が好きなのだつた。人けのない高い山小屋に獨りではいつてゐるときのやうに、都會生活のいらだたしさも、或ひはまた愴惶として出かけて來た時の、何かしらあわただしい落ちつきなさも、おのづと忘れられて了ふのであつた。

人生の輕薄な甘さを自然はもたない。けれどもそれは不變の慈愛に充ちてゐる。ある時は峻嚴に、ある時は優和に、さうした氣ままな變貌のうちにも、自然は無限の溫愛を示してゐる。そしてこの驛遞はかかる自然の點景として、私にとつては實に相應しい休息所なのであつた。けれども、私のそこを度々訪れるのには、驛遞とその附近の土地そのものを愛するといふ外に、そこをして私にまで永遠に忘れ難

く、且つ限りなく懐しませるもう一つの理由があつたのだ。それは全く私自身の個人的な想出に過ぎないけれども。

3

その時私達は三人だつた。

霧で一日停滞した次の晴れた日の朝早く、かちかちに凍つた雪の上に小さな夏スキーの跡を殘して、私達は驛遞に別れた。だいたいその時の目的は群別岳(クンベツ)へ登ることだつたが、雄冬山から暑寒別岳にかけるのは未知のルートだつたので、多少の不安ももつてゐた。

しかしさした困難もなく、その日のうちに雄冬山、濱益嶽と越して、その翌日には群別岳も樂に登つて了つた。その日は暑寒別岳の手前の鞍部に天幕を張つた。翌る朝は模糊とした深い霧のうちに明けた。暑寒別の裾だけが僅かにうつすらと隱見してゐた。しかしその頂上についた頃には、霧は跡方もなく消え失せて、五月の太陽がきらきらと私達を照りつけた。

その頂は南北に長く、幅もそれにかなつて廣かつた。頂上だけは雪も解けてゐて、そこに矮生の石楠が密生してゐる。私は、そんなにうち寛いだ山の頂は、その時が始めてだつた。蒼い大氣は澄んでゐて、

海の方まで見渡された。そこは、私達のその旅行での、一ばん最後の、そしていちばん高い山の頂だつた。もうその日の夕方には、幾日か前に私達がスキーを擔いで出かけていつた海岸の町に歸りつくことが出來るのだ。私達は思ふ儘に休息をとつた。誰の額にも、不安の影は少しもなかつた。幾日かのスキーの疲れを、その暖い頂の草地に拋り出して、高い五月の蒼空に仰向きながら、風に膨んだ空想を飛ばす氣儘なひとときが、どんなに樂しいものであるかを、私はそのときはじめて知つたのだ。まつたくその山歩きは、さういふ意味でも數々のあたらしい印象を與へてくれた。

けれども、そこをして、その時をして私にまで永遠に忘れ難くかつ限りなく懷しませるものは、その時の一行に、私の最も親しかつた友人の一人が加つてゐたことである。そしてその友人は、その翌年の冬に、山でのちよつとした災難から、永久に死の眠について了つた。唯それだけのことである。だから若しここに假令少しの說明と情意を示し得たとしても、結局かかる私の心情は、單なる感傷と偏愛に過ぎないかもしれない。純粹な私自身の個人的な想出と書いたのも、そのためなのである。幸に私は多くの親しい友人をもつてゐる。けれども、彼ほどその性格や趣味や傾向や、更にその缺點に於てすら、私自身のそれに近いものを感じさせた友人は無いのだ。そしてさういふ友人は、生涯を通じて果して幾人とあり得るであらうか。かかる意味でも、彼は私にとつてはまたと得難い山友達の一人であり、更に人

生のうへでの心友でもあつた。その時の他の一人の友人とは、いつかはまたもつことのあらう愉しい山旅に、明るい希望をつなぐことも出來る。しかし既に亡き友には、現在の山歩きの悦びさへも頒つことは出來ないのだ。そのことは、むしろ時には一つの焦燥的な感情をさへ、私にまで味はせるのであつた。そのあたり一帶の土地そのものへの愛着を、更に強める私の想出といふのはそのことである。

4

北海道の西海岸は一般に斷崖が多く續いてゐて、いはゆる奇勝に富むところが多い。積丹半島などは最もよく知られたところだ。增毛から雄冬、濱益、厚田と石狩の町に至る海岸も、さうした斷崖に富む丘岡で、處どころそれらの崖を突きひらいて海に流れ出す河の口に、小さな漁村がわびしく屯してゐるのである。そして、ときには數里に續く斷崖に隔てられたそれらの漁村と漁村とを點綴するのが、障壁を迂回して山腹につけられた險阻な山道なのである。雄冬から厚田まで僅か十數里の間にも、山道と名づけられたものが三つもある。雄冬山道・送毛(オクリケ)山道・濃畳(ゴキビル)山道などがそれだ。これらの山道もそのむかし漁村の繁榮した頃には、おのづと活氣を漂はしてゐたであらうが、しかし漁村の衰微とともに、いまでは全く淋しい山みちと變つてしまつた。

けれども自然の淋しさは、ウァンダラーにとつては、ときに、この上ない心やすさともなるのであらう。落魄して北國の僻陬な漁村から漁村へと渡りあるく旅藝人の、滑りがちな山みちに往き惱んでゐるのなどと行き交しても、彼らの悲慘な人生に思ひ煩はされることもなく、少年の如く輕やかに、それらの山みちを越して行つたことなどもあつた。

5

明治十年十二月開拓使刊行の、開拓使測量長聯邦海軍大尉モルレー・エス・ディの『北海道測量報文』といふ本をみると、石狩の町から增毛の間の海岸の測量を行つた時の記事が載つてゐて、簡單ながら、この邊の風景や、地名の變遷などが解つて面白いから、ここに原文のまま少し書き拔いてみよう。

石狩ヨリ益毛（筆者註、現在の增毛）ノ間ハ海濱ニ接近シ佳景ノ地多ク、人ノ心目ヲシテ怡バシム。其道路ハ、石狩ノ樹木森々タル卑濕ノ地ヨリ漸ク隆起シ、野草蕭々トシテ稀ニ矮小ノ槲樹アル丘岡トナリ、「ゴキビル」山脈ニ接セリ。蓋シ其山頂一樣ナラズ、最高ノモノヲ「チヤラシナイ」ト稱ス。

此丘岡ハ其端高サ二十尺乃至一百五十尺ナル峭岸トナリ、「ヤソスケ」（筆者註、現在の安瀨）ニ達ス。其北ハ「ゴキビル」山脈數百尺ノ絕壁ヲナシテ濱益毛（筆者註、現在の濱益）ノ近傍ニ連ナル。此際

只二三ノ小渓及ビ小灣アルノミ。

濱益毛ヨリノ海岸ハ、稍北西ニ向テ復絶壁トナリ、而テ益毛山脈ハ高ク海濱ニ聳エ、數條ノ瀑布其間ニ懸レリ。又奇峰幽洞アリ、風色絶佳名狀スベカラズ。

該岌ノ極西端ナル「オフイ」崎（筆者註、現在の雄冬）ハ、沿壁ヲ航スル船舶ノ爲ニ無上ノ地標（ジカタノイジルシ）ニシテ、其赤色沙石ノ絶壁ハ高ク峙チ、晴天ニハ數里ノ沖ヨリ認ムルヲ得ベシ。

「イワオイ」（筆者註、現在の岩尾）ハ、「オフイ」崎ノ北及東ヘ凡三英里ノ小灣上ニ在ル一小漁村ナリ。余輩ハ該所ニ於テ灣ノ北部ニアル渓間ヨリ得タリト云フ硫黄ノ見本ヲ見タリ。

此岌ニ聳ユル連山ハ西海岸中ノ高山ニシテ、就中「オフイ」山最モ高ク、三角測量ノ標柱場ニハ極メテ適當ノ場所ナリ。余ハ其後匂坂（筆者註、測量隊の一員）ノ其伍ト共ニ此高峯ニ一旗標ヲ建タルヲ聞キ、大ニ感喜セリ。

益毛ノ邑ハ、此連山ノ北ニ當レル小灣上ニアリ。東ハ地勢廣濶ニシテ樹木茂密シ、風景頗ル佳ナリ。

6

しかしこのやうな海岸の斷崖に富む地形のみが、このあたりの風景を特異づけるのではなかつた。そ

れは何處にでも見出せる一つの地學的な事實に過ぎない。このあたりの海岸風景を特異づけるものは、何といつても、文化に遠ざかつたわびしい漁村と、その前に浩茫として擴がる空の低い海であつた。そこには南海の半島や島嶼の海岸に見られるやうな、南國的な快明な氣分の影もなく、風景はむしろ北暗鈍重で、あくまで北國的である。そしてかうした自然と環境の中の人生も、またひどく暗いものなのである。それは、かのシュペングレルの、自然とは人格的な中味を以て底まで飽和された體驗であり、それ故に一般的な自然は存在しない、といふ意味に於て、ひとり私の見た私の感じた私にのみ特殊な自然ではなかつた。それへの關心と好惡とはしばらく擱き、少くともこれらの漁村風景に關する限りはさうである。漸く一つの山道を拔け出た高い崖の上から、殊にそれが曇り勝ちな晩秋ででもあれば、果しなく展げられた暗い海に對して、むせび泣くやうな存在にしか過ぎない、これらの淋しげな寒邑を眺める時に、果して誰がそこに美しい自然と人生を見出すであらうか。そこでは、長い山歩きから下つて最初の人家を見出した時の悅びと懷しさとを、そのまま經驗することはないであらう。

とにかく北海道の西海岸を旅行してゐて、いちばん私達の旅心に強い感動を與へるものは、荒廢した漁村の姿である。漁村の榮枯盛衰の跡である。この邊の海岸にしてみても、更に忍路（オシヨロ）、岩內（イワナイ）邊にしてみても、壽都（スツツ）から南に海岸を歩いてみても、到る處さびれた漁村が、屈曲の多い暗い北海の海岸線をつら

ねて、貧しい夕暮の煙のうちに、生氣なくしぜんの荒廢に身を委せてゐる。昔繁榮した頃は千戸を數へたといふのに、今は僅か數十戸に止まるといふやうな漁村は少くない。西海岸の漁村は概ね近來は衰微するばかりである。これは、鐵道が開けて海岸地方の交通のさびれたのと、魚族の收獲がいちじるしく減少したことが主な原因であらうが、何によらず荒廢の跡といふものは、通りすがりの旅人の心には殊に深く印象づけられるものである。北海道の農民生活は悲慘であるが、これらの漁村にも、それに劣らない荒廢と悲慘な生活は存在してゐる。これらの漁村の榮枯盛衰の跡をたどつてみることも興味深いものがあらう。更により深き社會的關心のもとに、それらの事實を顧みることも、決して徒勞ではないと思はれるのであつた。

附　記

冬の雄冬山は私はたつた一度しか知らない。春によく歩く群別、暑寒への縱走を、四五人の友達と天幕をもつてやつてみるつもりで、驛遞を出たのは二月の三日だつた。その日は雄冬山を越して濱益御殿の手前の鞍部で霧のために幕營を餘儀なくされ、夜にいつては吹雪となつて新雪が二尺近くも積り、翌日はまた雪だつたので、それぎり驛遞に引き返して了つた。

しかし、冬、暑寒の方へ廻るのは、困難の尠い割には、面白い山歩きが出來ると思つてゐる。驛遞に泊つてゐるだけでも、スキーイングの享樂なら十分だ。雄冬山にしろ、驛遞の後の天狗山にしろ、かなり立派なゲレンデだし、それに驛遞から別刈への道は、ちようど手頃の傾斜をもつた草原の丘地が二里も續いてゐるんだから、一本まつすぐに滑つて來ても飽きる程長い。海岸近くでありながら、非常に雪の多い地方だから、遊ぶにはこの上ないところだ。いまでは、まだ留萌や增毛の極く小數の人達が、日曜毎に行くぐらゐのものだが、この邊はスキー地としても、かなり惠まれた地形にあることは確かだ。

春の殘雪を利用して、雄冬の海岸を廻らずに、雄冬山を越して濱益御殿のあたりから幌の方へ下るのも面白い。私は五月のある晴れた日に、朝早く驛遞をたつて——その時はたつたひとりで、サンマースキーももたなかつた——昔の山道をそのまま幌へと下つたことがあつた。四百米位の高さのところで雪が消えて了つてからは、少しの間熊笹の中を漕いで、やがて丘のうへの畑に出て來た。幌の村についたのは正午であつた。その時は厚田の方へは行かずに、濱益から瀧川に通ずる道を歩いて、その日は泥川の驛遞に泊つた。ここもやはり驛遞が唯一軒あるきりだ。廢道の清水峠の路は、恐らく橋なども落ちてゐやうといふことなので、翌日は名もない低い峠から奥當別村の四番川といふ部落に出

て、それからまたひとつ青山峠といふのを越して西徳富の町へと出て行つた。

冬、スキーでこれと同じ道を歩くのは尙更面白いに違ひない。スキーの登山が盛な割に、スキー旅行のあまり行はれないのは何故であらうか。さう言ふ私自身今迄にあまりやつてゐないのは、まつたく時間がなかつたからだ。

しかしスキーでの峠越や平地旅行がもつと試みられてもいいやうな氣がする。少くとも北海道のやうに、高山に惠まれず而も雪には極めて惠まれてゐるといふやうなところに於ては。そしてさうしたスキーウァンダリングには、スイス式の立派な山小屋もいいけれども、かうした昔ながらの古風な驛遞なども實に相應しいやうな氣がする。勿論いいコンディションをもつたものは尠いのだが、どつちといへば、心情に於ては私はむしろ後者に味方するものだ。

（一九三〇・一〇・五）

中川賢一さん

奥　繁

今は暑寒沢のズーット奥まで道路があるので、増毛山道を歩かなくてもいいんだ。奥まで行って、山に登ると一時間程で武好橋につくんだ。日帰りで充分さ。時間が余るんだ。あんたのお祖父さんが、昔、武好の駅逓に泊まって、翌日、四kmほど行くと武好橋なんだ。そこで、キット火縄銃を木に立掛け、まず水を飲んだ事だろうし、汗も拭って、一休みしたハズだよ。そこの水はきれいでねー。俺たちも、熊撃ちのときは近くに泊まって、その水を飲むんだよ。金魚屋さんに売っている緑の長い水藻が生えていてねー、お祖父さんは、そこに架っている武好橋を火縄銃を持って、何度も渡ったんだから、あんたも一緒に行って、一度渡って見ないか？熊かい？熊なんか大丈夫だよ。俺が離れずに付いているからさ。

水面からねー、三〇cmほどしかない低い橋でねー、深さかい？そうだなー、三〇cmあるかないかくらいなもんだ。長さはねー、三mくらいだよ！丸太を二本渡してさ。それに、小さな丸太を横に並べて、釘やカスガイなんかで止めてあるだけのもんだ。なー、今年こそ行ってみようよ、と毎年誘うのですが、春になると、なんだかんだと言って行こうとしません。

火縄銃を頼りに、熊がうようよする増毛山道やゴキビル街道を急ぎ、小樽へ往復するお祖父さんの血が、彼の体の中には、もう薄まってしまったんでしょうか…。火縄銃では、余程の好運でなければ、熊は倒せませんが、火縄銃以外に護身具が無かったんです。

お祖父さんが長生きして、話しを聞ければ、その闘志には、村田銃での熊撃ち名人も一目も二目も置いた事でしょう。ある時、その火縄銃を見せて貰った事がありました。手入れが良く　美しい銃で、お祖父さんを尊敬していた事がしのばれました。

在り日の中川さん

合掌

『北のハンター』
留萌猟友会員の記録

平成九年八月三十一日発行

発行　留萌猟友会

編集　永原晴夫
留萌市幸町三丁目

印刷　株式会社留萌新聞社
印刷事業部あるふぁらんど
留萌市栄町二丁目三

昭和24年（1949年） 4月30日、武好駅逓に訪れた北大山岳部員
左から山崎英雄、中村利一、奥村敬次郎、有波敏明、野田四郎
熊野純男の各氏、復員後の外套、ゲートル姿が当時を偲ばせる
＜提供：熊野純男氏＞

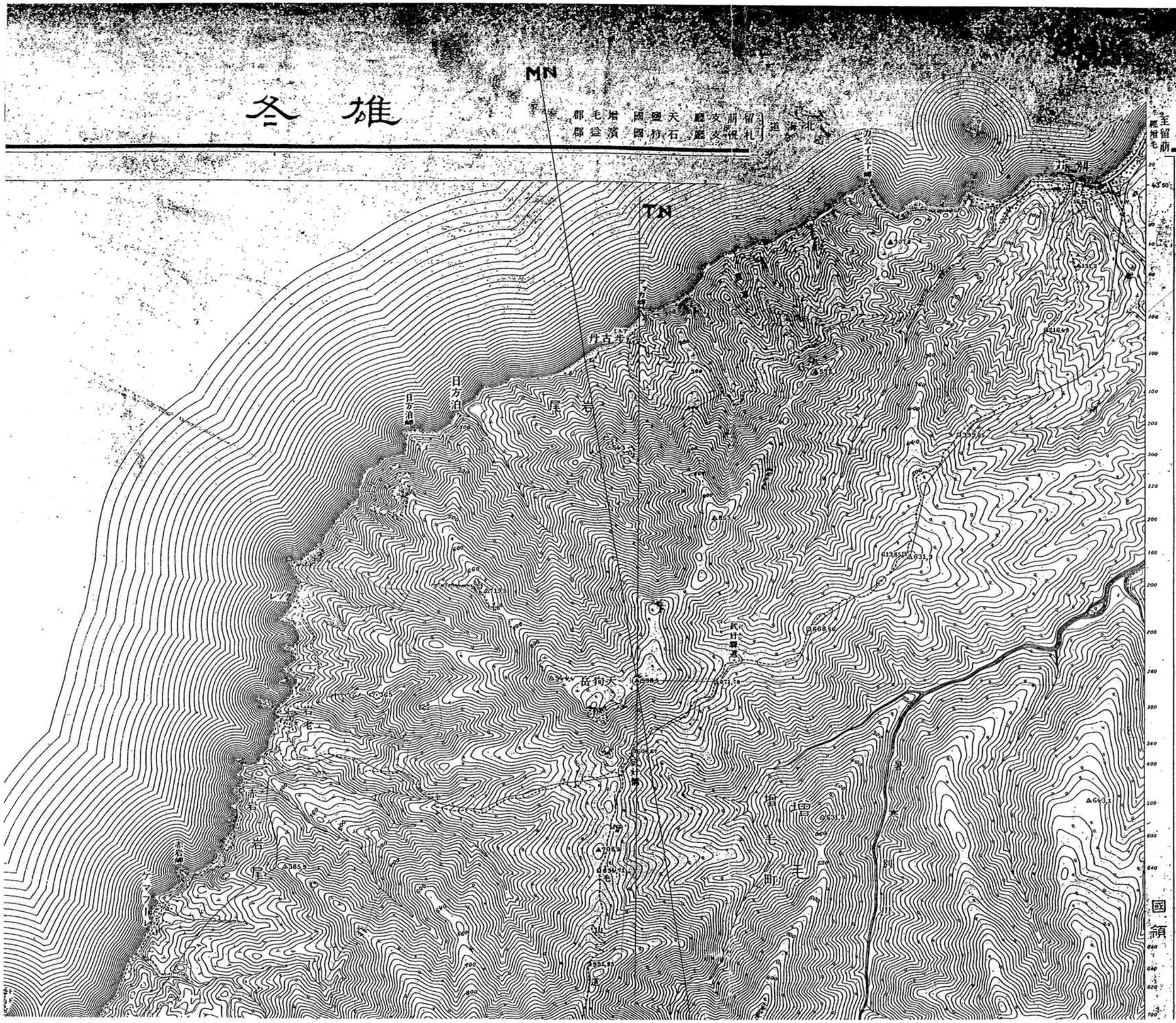
坂本直行氏が大正15年（1926年） 6月12日撮影の武好駅逓
人物は中村亀太郎翁と思われる　　提供：坂本ツル夫人

平成10年2月20日、坂本邸に集まった「増毛山道の会」会員
左から阿部事夫、桜井勝治、熊野純男、伊達東、高澤光雄、
坂本ツル、和田直之の各氏　　＜撮影：渡辺千秋氏＞

昭和24年（1949年） 4月30日　北大山岳部員が訪れ、階下部分
が雪に埋もれていた武好駅逓。一行は野田四郎、奥村敬次郎、
山崎英雄、熊野純男、有波敏明、中村利一　提供：熊野純男氏

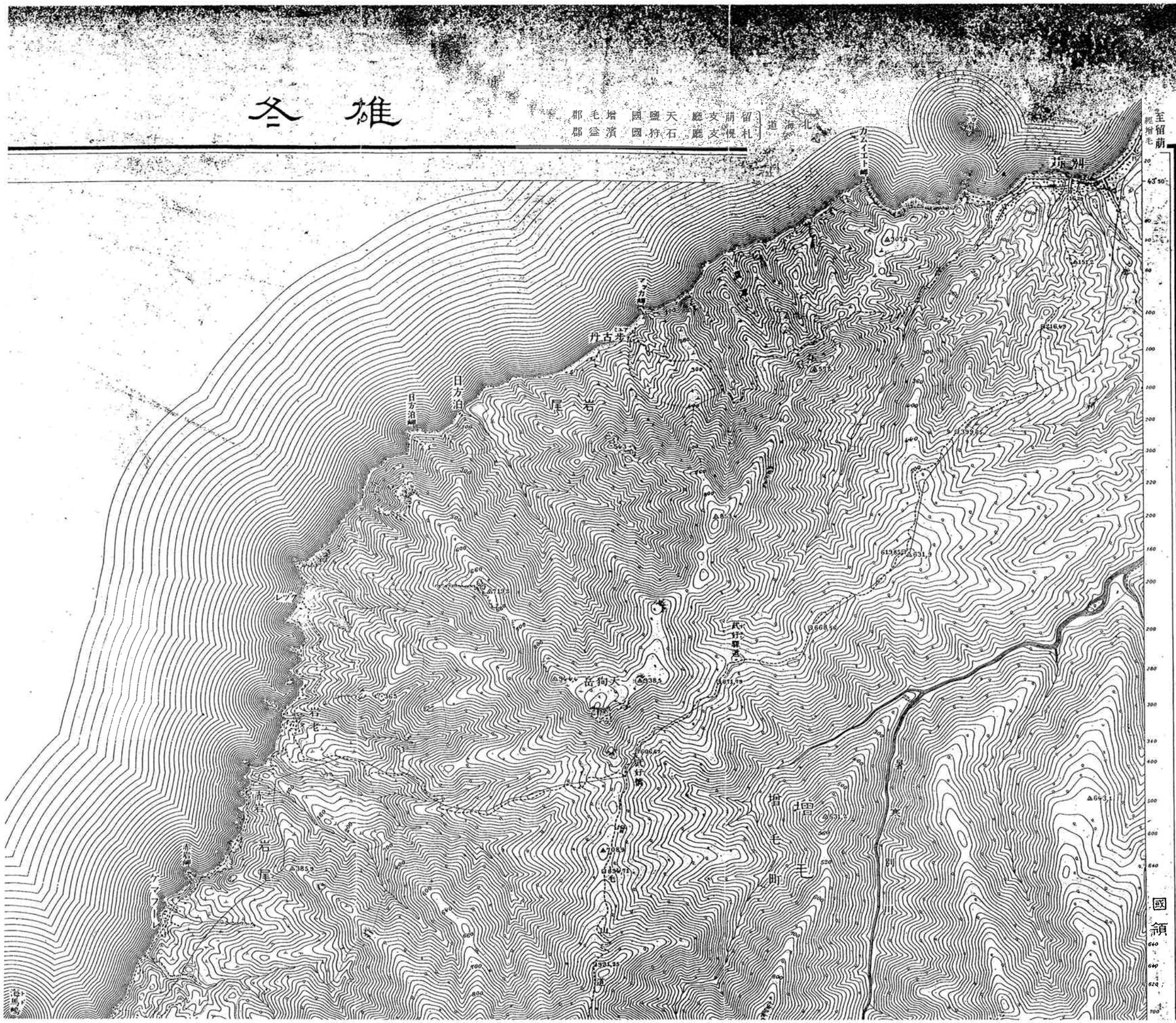
大正八年測図　初版

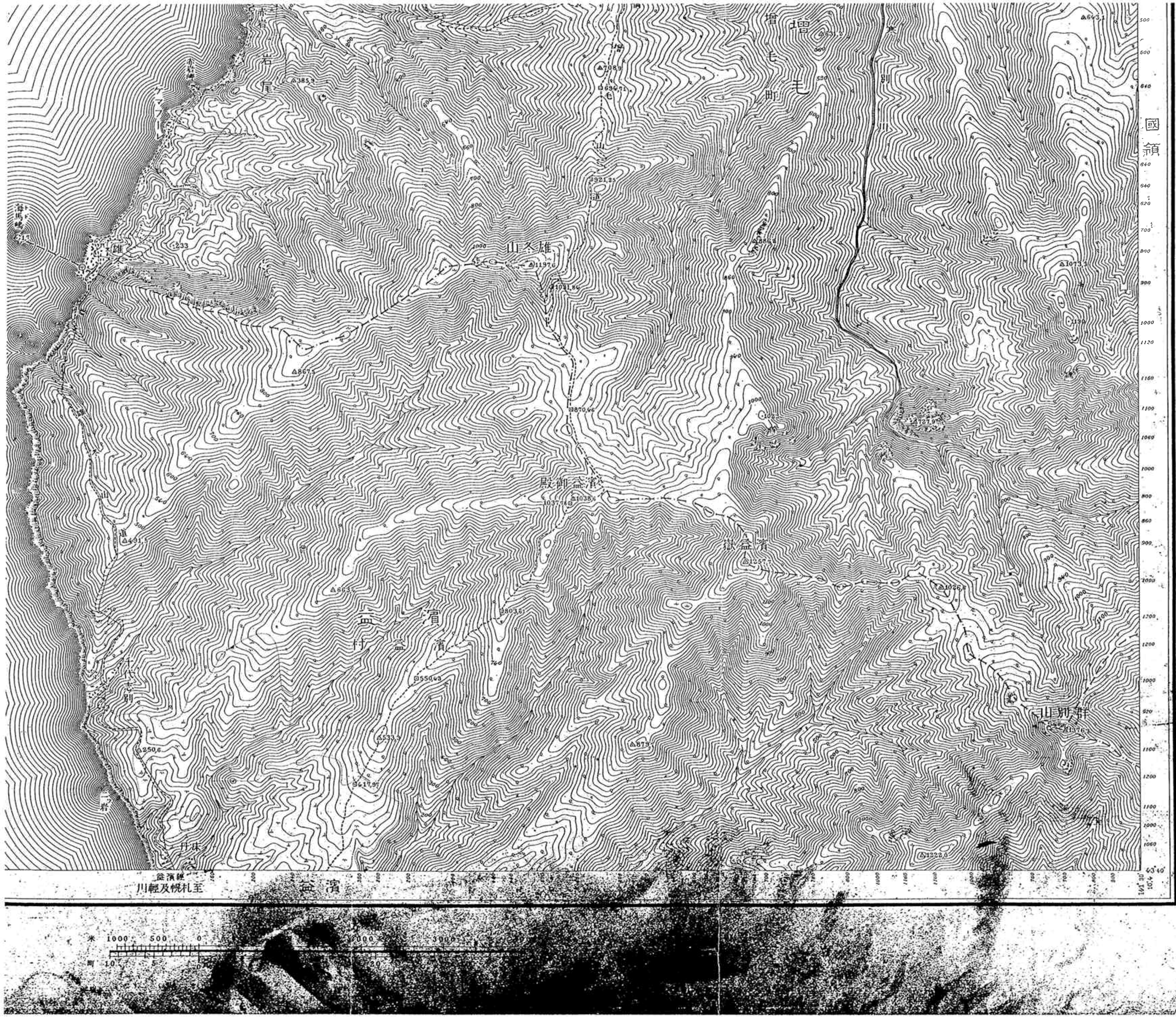
五万分一地形圖留萌十號（共十一面）



大正八年測図　初版

五万分一地形圖留萌十號（共十一面）

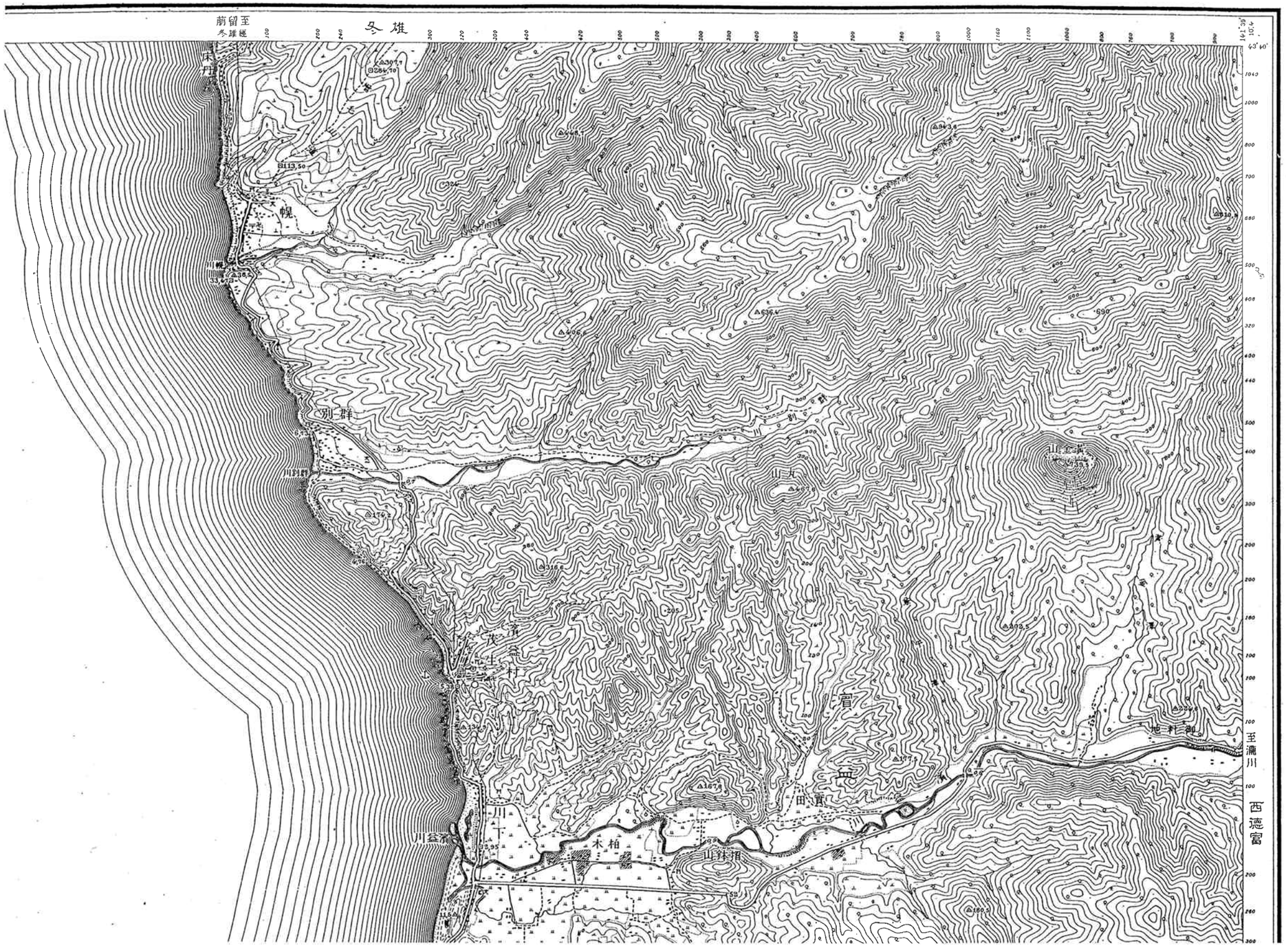




圖郭外右肩ノ地名ハ本圖所屬二十万分一圖ノ名號ナリ
眞高ハ東京灣ノ中等潮位ヨリ起算シ米突ヲ以テ示ス

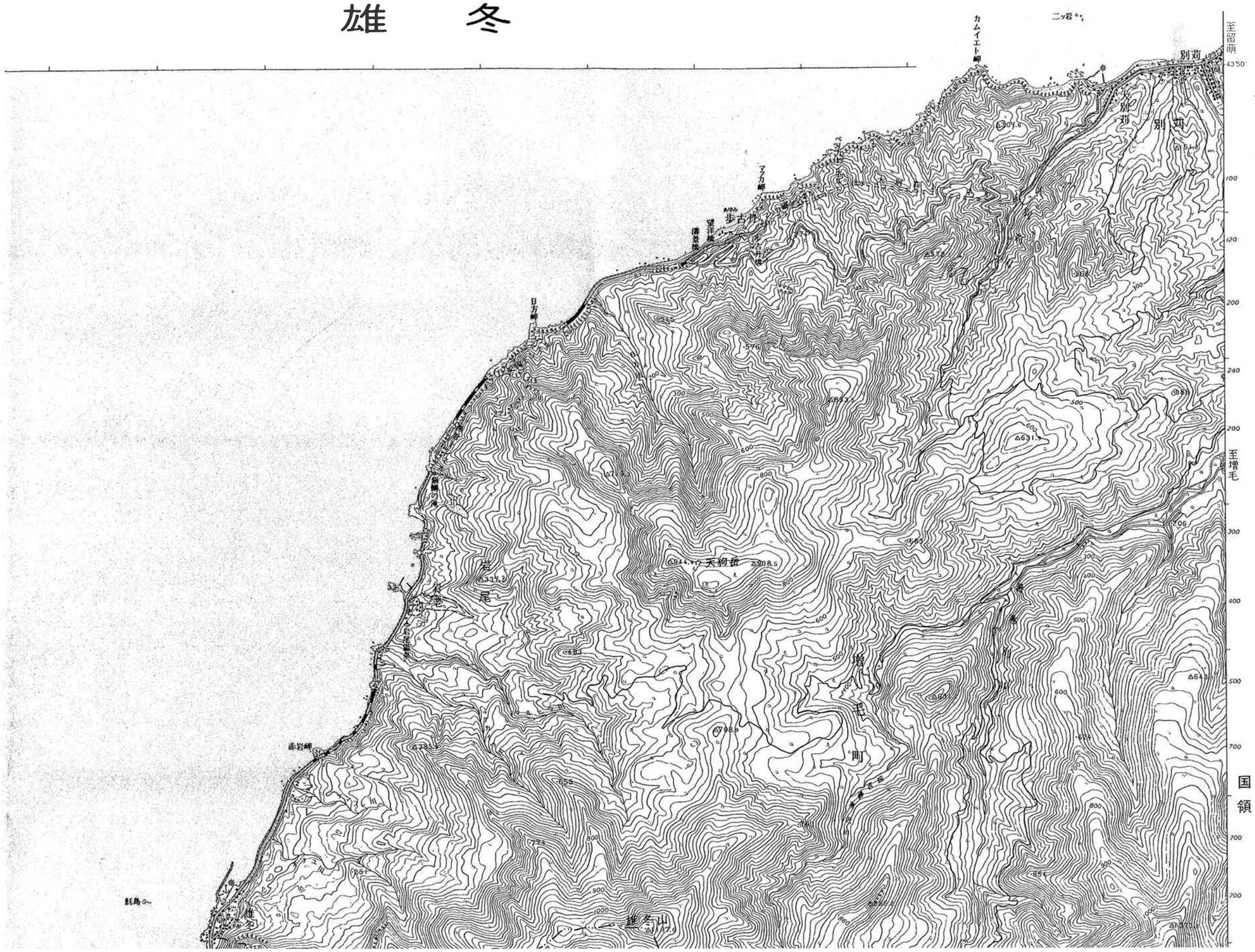
濱益

北海道　札幌支廳　石狩國
濱益郡
厚田郡



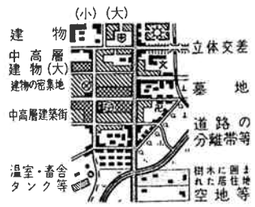
五万分一地形圖留萌十一號(其十一面)

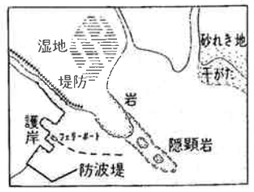
雄　冬



記

- トンネル
- 幅員13.0m以上の道路
- 幅員5.5m～13.0mの道路
- 幅員3.0m～5.5mの道路
- 幅員1.5m～3.0mの道路
- 幅員1.5m未満の道路
- (14) 国道および路線番号
- 庭園路等
- 建設中の道路
- 有料道路および料金所
- 単線 駅 複線以上 (JR線) (JR線) 側線 地下駅 トンネル — 普通鉄道
- 地下鉄および地下式鉄道
- 特殊道
- 路面し鉄道
- 索道
- (JR線) 建設中または運行休止中の普通鉄道
- 橋および高架部
- 切取部
- 盛土部
- 送電線
- へい
- 石段
- 都・府・県界
- 北海道の支庁界
- 都・市界，東京都の区界
- 町・村界，指定都市の区界
- 特定地区界
- 植生界
- △52.6 三角点 ·124.7 標石のある標高点
- ⊡21.7 水準点 ·125 標石のない標高点





1. 投影はユニバーサル横メルカト子午線は東経141°
2. 図郭に付した短線は経緯度差
3. 高さの基準は東京湾の平均海

第十四號
十年十月五日 御検印済

駅逓諸課文移録第貳号 明治十年七月 叢冊番号 〇〇九九八 項六五

増毛山道字分勇師へ止宿所再建之件

本使七等属調

上 稟

駅逓課

検査課

公文課

御達按

丙第百九號

留萌分署

管内増毛浜益之中間字分勇師休泊所先年焼失後増毛郡寄留池田常吉ナル者仮ニ草小屋ヲ構ヒ行旅ヲ接待致来矣得共其結構(ゲッコウ)編(ユヒ)カニ×雨露ヲ凌クノミニテ旅客之難渋不尠内然ニ仝人ヘ一時金拾五円ヲ付与セハ夫々之修築ヲ加ヘ以後官費ヲ不仰自辦スルモノ趣相聞候便否篤ト調査急速其状可然旨相達矣事

札幌本方

明治十年十月

開拓使大書記官堀基

結構
建物の構造

奉願書付

私儀

本年七月中増毛山道分勇師休泊所先年焼失致候
葦屋作リノ小屋ヲ設ケ畑作傍ニ通行小商ヒノ見
出ヲ以住居仕候所通行旅客休息又ハ風雨ノ折一
宿ヲ乞ハルル間有之候得共何分手狹ニ而旅客ノ
需ニ難応依而奉願上候モ恐多奉在候得共増毛屋
雲町ニ御建設有之元開墾小屋壹棟御入用モ無御
座候ハハ私ニ被下置度外ニ金八円運般修繕急御
手當御下渡被成下度左候ハハ通行旅客之煩ヒニ
モ不相成様可仕尤已降ハ官費ヲ不仰自弁可仕候
以御仁恤願之通御聞届之程只管奉願候也以上

三重県下飯高国　郡松坂在塚本村農

増毛郡山道分勇師寄留

池田常吉

増毛村

常吉身元引受高嶋甚太郎

別所村副惣代　浅利吉右衛代

山本代兵衛

大書記官堀基殿

前書願出之趣相違無之ニ付奥印仕候也

増毛郡長

十年十一月廿五日

縣　武雄

朱書

印萌

受付 十年十二月十九日 第 号

第百五拾六号

増毛山道字分勇師寄留

池田常吉ヘ元開墾小屋

併ニ一時御手當金被下度義伺

増毛郡山道字分勇師寄留池田常吉ヘ一時御手當

之義ニ付丙才百九号御達ヲ得奚事実地ニ取調奚

處実地見込モ有之ニ付専ラ旅客ヲ接待致ス等ノ

志ニ者有奚将共家屋結構可致目度モ無之ハ今以

テ其意ヲ不果趣ニ付猶持来本人之見込等可申出

旨相達之處別紙之通自今増毛郡星雲町ニ存在ノ

山口縣元支配中営構奚開墾小屋本使ヘ引継ノ分

御下渡シノ上右運般修繕ノ為メ一時御手當トシ

テ金八円御給与相成奚ハハ更ニ別紙画図面ノ通

浚場ニ倍ロ新ニ地所ヲ○シ修繕仕リ以後官費ヲ

不仰行旅之差支モ無之様可仕旨申立奚尤モ右小

屋ノ義ハ将来修繕ヲ加フル有用之家屋ニモ無之

旦願人モ無之ニ付壬甲年来唯破損ノ侭今ニ存在

仕奚義ニ付出願ノ通御下渡シ相成奚ヘ者官民共

ニ至便ト在被致奚何分願意御許可相成奚様此度

書類相添此段奉伺奚也

留萌分署在勤

十年十二月　日

五等属吉田衡平

大書記官堀基殿

本文山口縣元支配中営構エ開墾小屋之儀ハ

引継書付ニ不相見殊ニ　件ニ於東京大蔵省

照会完済ニ至リ奚方栗原七等属出京中石井

五等属申聞奚間無代引継ニモ可有之或已後

差支無之与在奚

貸附課

調所 内海 松浦 鈴木

受付 十年十月廿七日 第百六十七号

受付会計 一四四七四号

増毛山道ヘ休泊所建設ニ付御手當ノ件

木澤七等属調

上局

堀基

内海

鈴木

駅逓課 ○

検査課 ○

公文課

貸付課 ○

増毛山道字分勇師寄留池田常吉ヘ開墾小屋併ニ一時御手當金被下方之義別紙吉田衡平伺ヘノ御指令左ニ相伺候也

御指令按

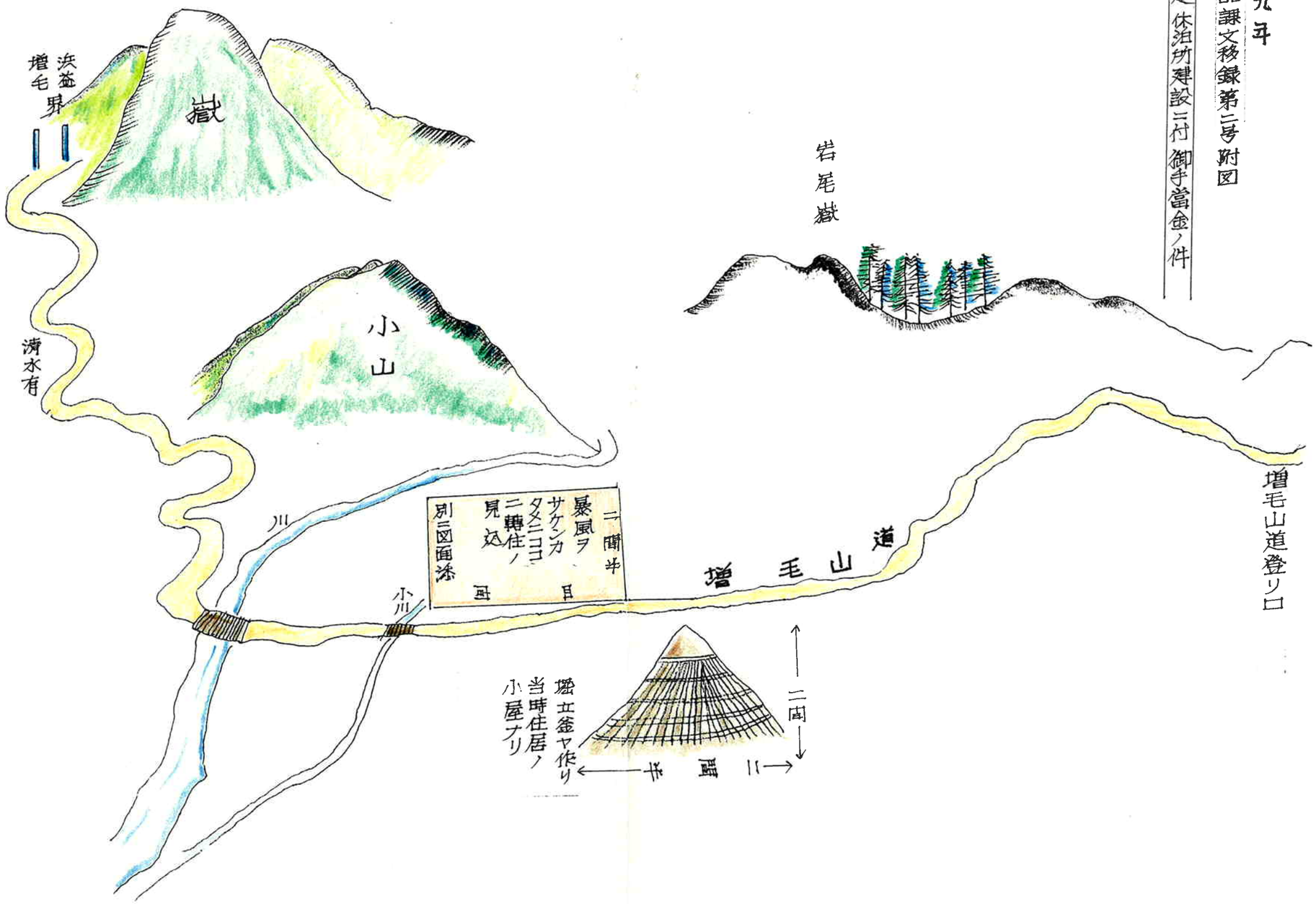
伺之通

但手当金八円八銭分普通費内ヨリ可仕払事

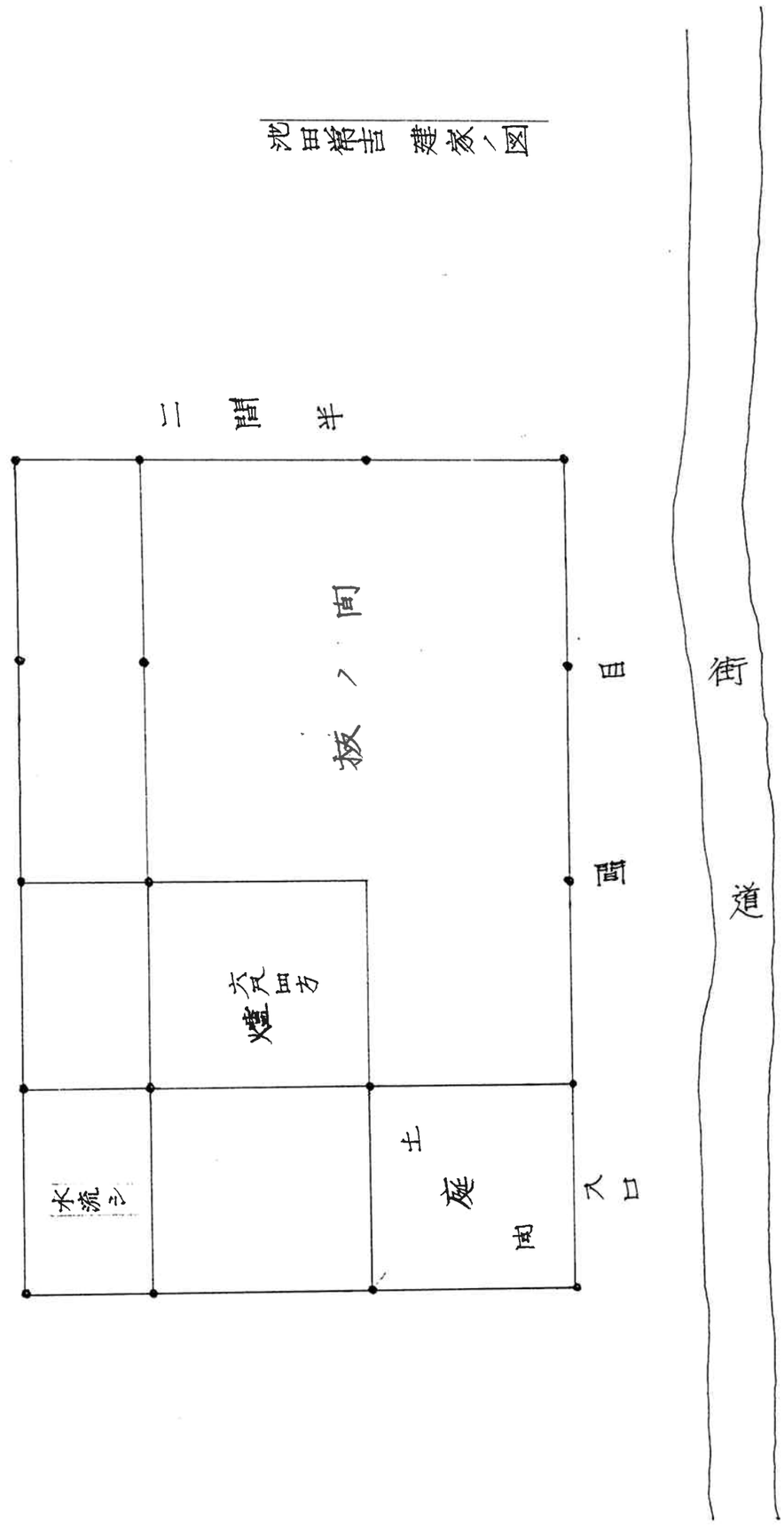
明治十年十二月廿二日

明治九年
駅逓諸課文移録第二号附図
増毛山道休泊所建設ニ付御手當金ノ件

5~4



沈田弟吉　建家ノ図



留萌支庁管内

武好駅逓所

沿革

一、所在

増毛郡増毛村大字別刈村ブヨシ

一、布令録（明治十年）目次三六号丙第百九号

増毛浜益間山道休泊所便否取調。

一、開拓史公文鈔録（明治十年十月十五日）丙一〇九号

分勇師休泊所先年焼失後池田常吉ナル者仮ニ

草小屋ヲ構工行旅ヲ接待。

一、北海道庁事業行程報告

明治二十一年度増毛山道中間ニ家ヲ建テ人ヲ

置キ宿泊ニ供ス。

一、設置

明治二十八年九月三十日

駅逓取扱人　中村亀太

一、新築

明治三十五年十一月九日

木造平屋　二十四坪七合五勺

駅舎取扱人　中村亀太

一、模様替増築

昭和十二年十月十四日

階下　壹坪
中二階　四坪五合　増築

駅舎取扱人　中村一男

一、駅舎修繕

昭和二年度実施

駅舎屋根葺替工事

一、金百九拾圓六拾錢　駅舎建坪二四坪

一、廃止

昭和十六年六月二一日　告示八五七號

昭和十六年六月三一日　限リ

駅舎取扱人　中村一男

LIFE C 161　12×25

明治十年　布令録

開拓使

丙第百九號　十月五日　留萌分署

管下増毛浜益ノ中間山道字「分勇師」休泊所先年焼失後増毛郡寄留池田常吉ナル者仮リニ草小屋ヲ構工行旅ヲ接待致来候得共其結構纔カニ雨露ヲ凌クノミニテ旅客ノ難澁不尠由然ルニ仝人ヘ一時金拾五圓ヲ付與セハ夫々修築ヲ加ヘ以後官費ヲ不仰自弁スヘキ趣相聞候條便否篤ト調査急速具状可致此旨相達候事。

北海道公報（昭16・6）第二千五百十八号

北海道庁告示第八百五十七号

左ノ駅逓所ハ昭和十六年六月三十日限リ之ヲ廃止ス

昭和十六年六月二十一日

北海道庁長官　弁塚九一郎

管轄支庁	駅逓名	所在地
留萌	ブヨシ	増毛郡増毛町字別苅ブヨシ

北大山岳部々報　二

昭和四年十一月十五日発行

雄冬山

伊藤秀五郎

五月十七日快晴

札幌駅発（前六、四四）―増毛着（二、一一）

別刈（二、四〇）別刈迄乗合自動車、山道をぶらぶら行く。約一里程して残雪となる。

武好駅迄（六、〇〇）スキーは持って行かない

五月十八日快晴

武好駅（五、二〇）―武好橋（五、五〇）七〇八米地点（六、二〇）―六、四〇）雄冬山頂（八、〇〇―八、十五）―浜益御殿（九、一五―九、三〇）増毛山道のあった尾根を下る。四〇〇米くらいで雪消え、根曲笹を暫くこぐ。道は消えて無い。―幌（二三、三〇）―郡別（一、三〇）茂生（二、三〇）―川下（三、五〇）御料地小学校（六、〇〇）泥川駅迄所（七、〇〇）

北大山岳部々報　八

昭和三十四年十一月十五日

増毛山塊

菊地池三郎、関祐次、杉本辰夫、越野正

昭和二十四年四月二八日　札幌発

二九日　曇後雨　深川発ー増毛ー別刈ー駅逓

三〇日　小屋ー武好橋ー

武好駅逓

小屋自体はまだ二、三年は大丈夫だが

ラス等は何もなく、縁の下に寝所があり

焚火は出来、雨は凌げる。

12×25

増毛山塊

野田、奥村敬次郎、山崎英雄、熊野、有波、中村

昭和二十四年四月二九日　札幌発ー別刈小学校

三〇日　曇時々雨後晴

小学校ー武好駅逓泊

12×25

北大山岳部々報　六

昭和十三年九月一日発行

雄冬山

瀬戸三郎、武田弘道、外二名

昭和十二年三月十七日　札幌発

十八日

絶えず電話線の唸り声につきまとわれ乍ら、雪の吹きつける中を、薄月さへ映してゐた。鰊漁前の浜辺を離れて、棟まで埋もれた駅逓の、やっと見出した入口の戸を叩いた。

12×25

雄冬岳

岩間喜吉、福地宏安、神村端夫（部外）

昭和十三年四月五日　札幌発

六日　晴後吹雪昨夜深川の待合室で寝る。

別苅村ー武好駅逓。

七日　晴後曇猛風駅逓ー雄冬項上下肩キャンプ。

八日　吹雪頂上らしき地点に至り武好駅逓に帰る

九日　吹雪、駅逓ー札幌。

駅逓は二階のあるヒュッテ造りになって木の香りぷんぷんとして居る。

12×25

武好駅逓 7:30
武好橋 8:00 〉約30分

北大山岳部々報　七

昭和十六年二月十二日発行

増毛山塊

葛西晴雄、星野昌平、羽田喜久男、有馬純

昭和十三年五月十三日　札幌発

新しくなった武好駅逓所に着く

略

増毛山塊　浅野芳産

林和夫、岩間喜吉、井山純吉、駒月陽一、

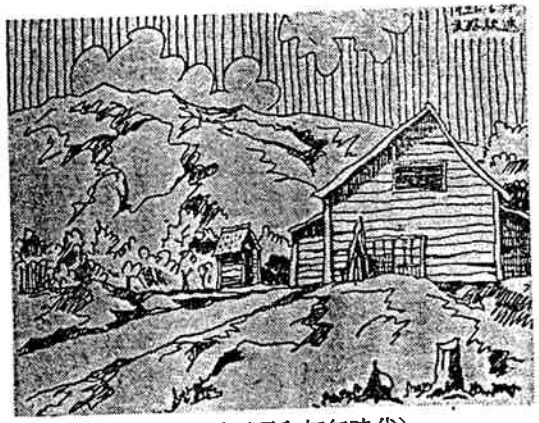
昭和十四年五月十日　札幌発

略

例のだらだらな道を小雨に濡れて、武好駅逓へ

明治二十年にこの場所より少し上即ち、天狗岳の真下、別苅のポンナイが登口となる三里十八丁の処に、武好駅逓の新駅舎が建てられた。

此の駅舎は後年建替が行われた際、積雪に耐える様、床下に脚柱を取り付けた高床式がとられ、三十坪程の平家建て乍ら、間口が広く、土間には外より筧が引かれていて、駅逓の建物としては珍らしく、特殊な施工がなされていたという。



武好駅逓（昭和初年時代）

留萌支廳　ブヨシ驛遞所

天塩國增毛郡增毛町大字別苅村字ブヨシ

敷地　九百八拾坪　國有地

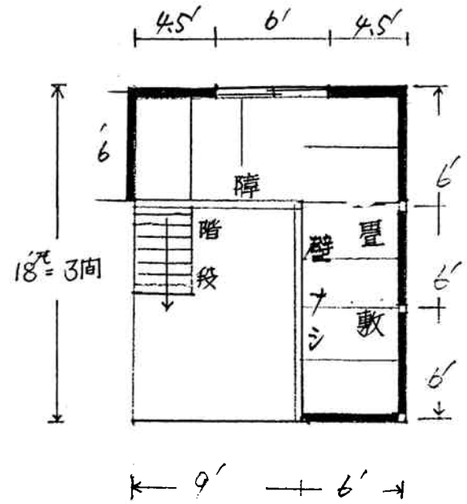
驛舍　階下弐拾五坪七合五勺　延坪參拾坪弐合五勺
中弐階　四坪五合

木造平家建壹部中弐階亜鉛引鐵板葺

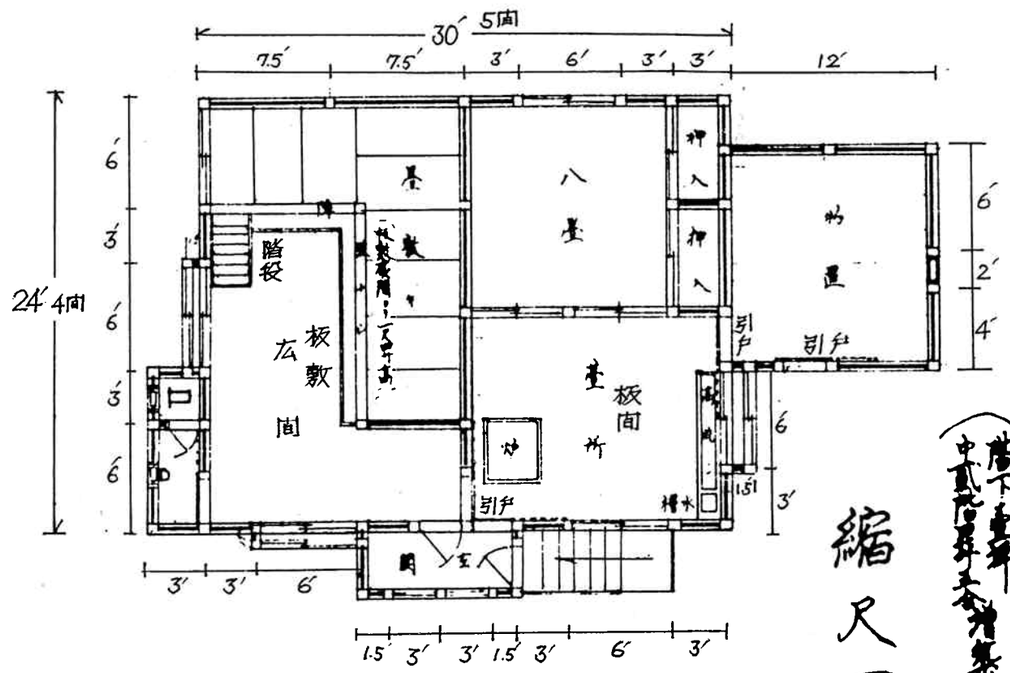
明治三十五年十一月九日新築
昭和十二年十月十四日模様替増築
（階下壹坪中弐階四坪五合増築）

縮尺百分ノ一

中二階



中二階部分



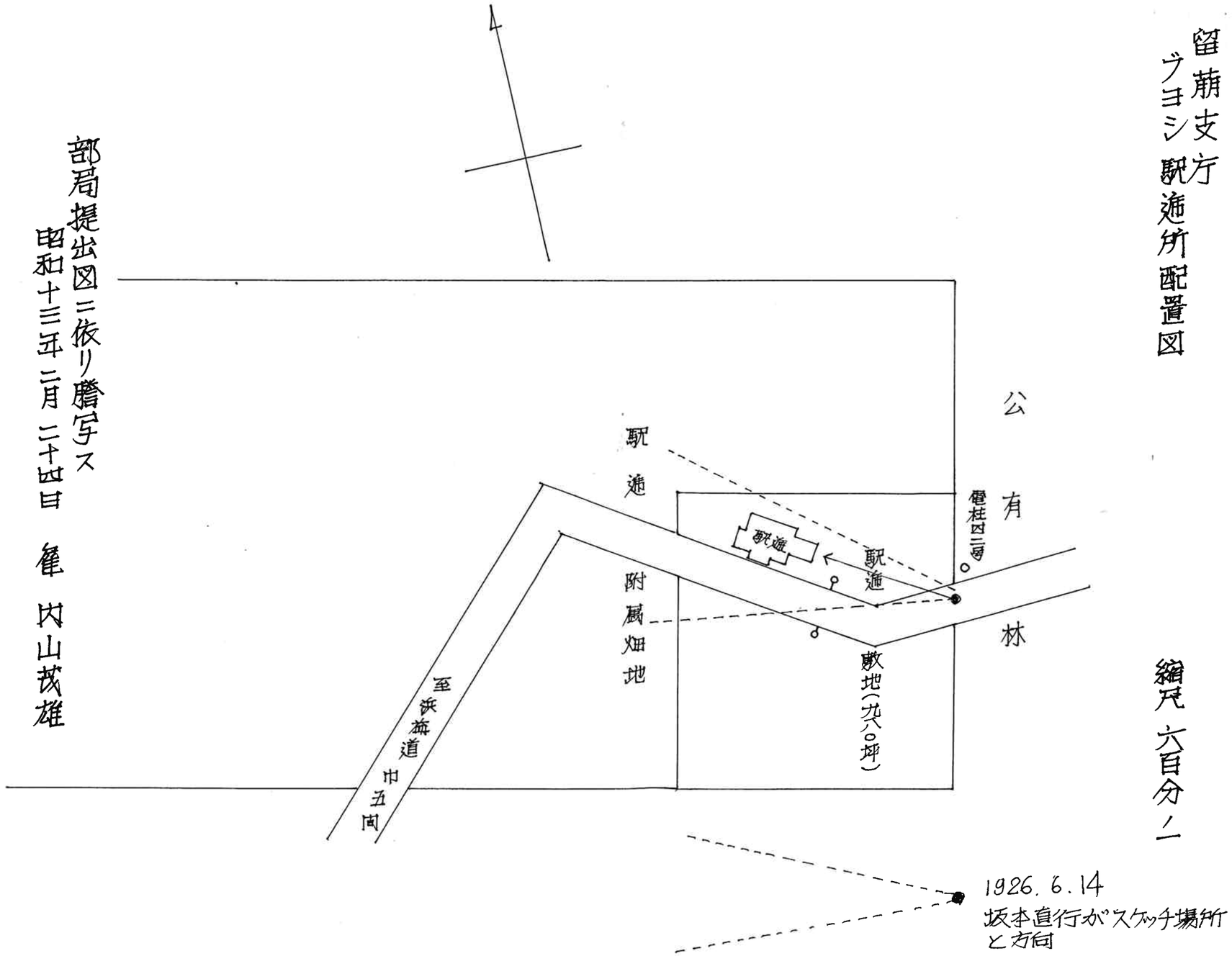
一階部分

部局提出圖ニ依リ謄寫ス

昭和十四年三月三日

雇内山茂雄

留萌支庁
ブヨシ駅逓所配置図



縮尺 六百分ノ一

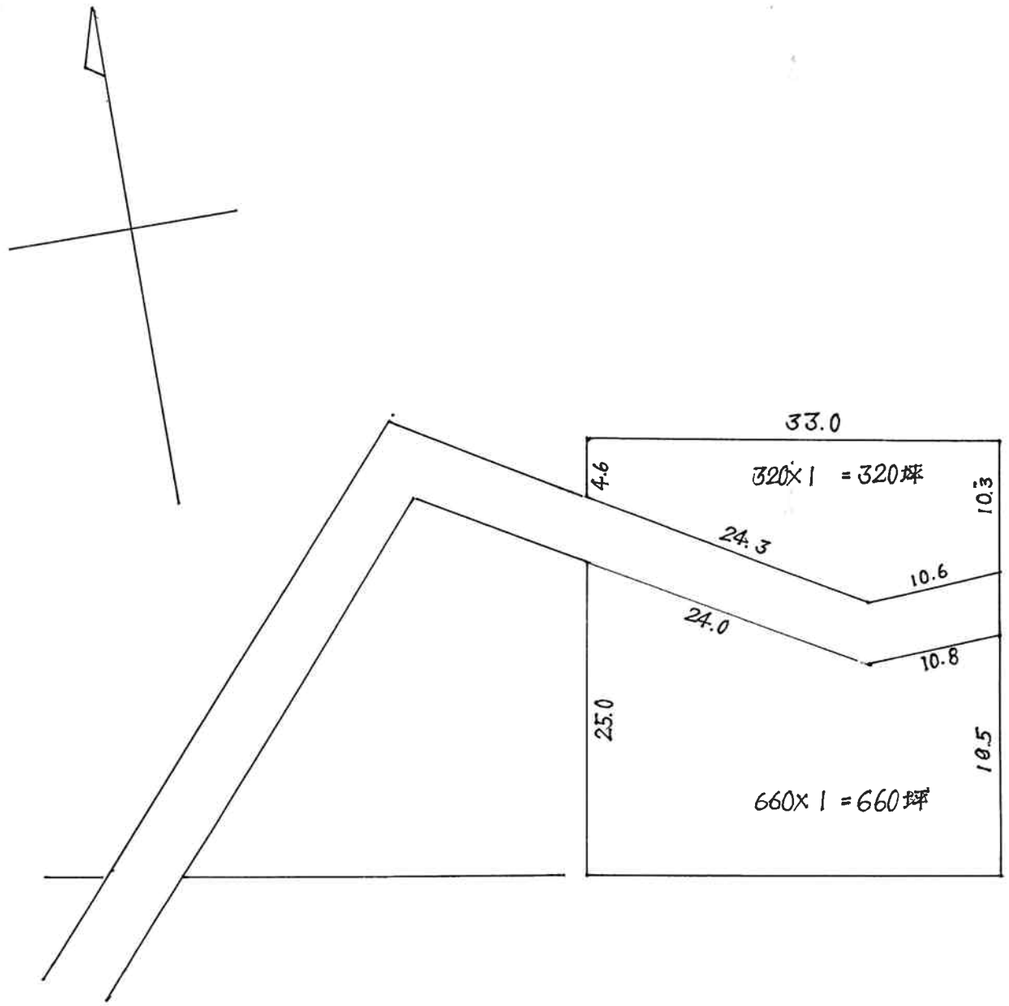
1926. 6. 14
坂本直行がスケッチ場所と方向

部局提出図ニ依リ謄写ス
昭和十三年二月二十四日 雄内山哉雄

駅逓附属物件付与関係 K2 678
昭和十六年度 辰道第六七〇號

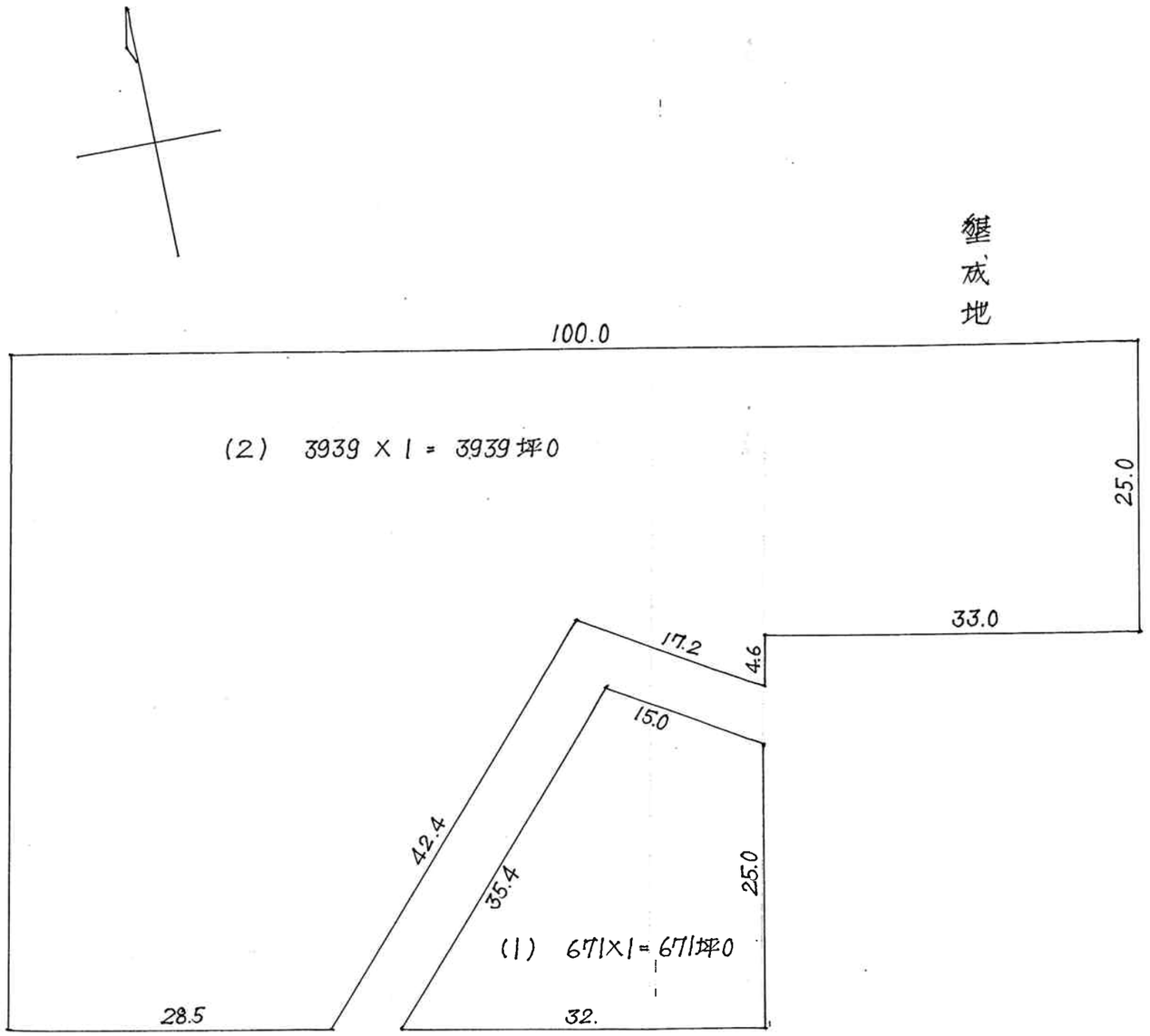
留萌支庁　ブヨシ駅逓敷地
天塩国増毛郡増毛村字ブヨシ
国有地　九百八拾坪

縮尺　六百分ノ一



留萌支庁　ブヨシ駅逓所　畑地
天塩国増毛郡増毛村大字別苅字ブヨシ

縮尺六百分ノ一



北海道庁
接
2.6.12
受
1841号

土第三二九号

昭和二年六月十日

留萌支庁長　八巻耕三　印

北海道庁長官　澤田　磨殿

駅逓所駅舎修繕ニ関スル件

当管内幌延村問寒別駅逓所及増毛町ブヨシ駅逓所ハ新設以来何レモ修繕ヲ加ヘタルコトナク屋根ノ如キハ破損ノ都度取扱人ニ於テ応急修理ヲナシツツアリト雖モ雨漏ケ所多ク常ニ困〇致居ル次第ニ有之候ニ付テハ前紙設計書ニ基キ修繕致度候條事情御涼察ノ上修繕費並ニ工事監督及検定ニ要スル旅費増額ニ付特段ノ御配慮仰キ度申候也。

ブヨシ駅逓所　駅舎屋根葺替工事内訳書　昭和二年度

一金　百九拾円　六拾銭

駅舎建坪　弐拾四坪

内訳

名称	寸法 長	巾	厚・深	員数	単価	金額	
淀	一二	四	〇五	六枚	一・〇〇〇	六・〇〇〇	破損ケ所取換
小舞	一二			九〇枚	一五〇	一三・〇〇〇	仝　上
柾葺	二寸	足		三六坪	四・〇〇〇	一四四・〇〇〇	
笠木	一二	二寸	角	三本	二・二〇〇	六・六〇〇	
大工				五人	三・五〇〇	一七・〇〇〇	屋根小破修繕
雑費						三・〇〇〇	

LIFE C 161

親土第一号

昭和十六年九月十九日

留萌支廳長　田中耕輔

北海道廳長官戸塚九一郎殿

廃駅逓所官設物件処分ニ関スル件

管下ブヨシ駅逓所廃止ト相成候処別紙調書ノ通其ノ功労顕著ナルモノニ付無償附與方御詮議相成度駅逓所規則取扱手続第二十五條ニ依此段及上申候也

尚元駅逓所取扱人中村一男ヨリ無償附與願書送付候

二付可然御手配慮相成度

調書

一、取扱人就職以来ノ業務取扱状況及勤務年数並地方開発ニ対スル效績ノ有無

イ　業務取扱状況及地方開発ニ対スル效績

本駅逓所ハ明治二十八年九月三十日ノ創設ニシテ現取扱人前取扱人タル実父中村亀太死亡ニ依リ昭和十一年六月十日業務継承ヲ命セラレタリ　前取扱人タル中村亀太ハ大正十一年四月十九日附採用

本駅逓所ハ増毛郡増毛町字別苅村ブヨシニ在リテ所謂増毛山道ノ最高位ニ建設シアリ道路頗ル險岨人馬ノ交通容易ナラサルモ創設当時ハ石狩支廳管内ト留萌支廳管内沿岸漁村ヲ通スル唯一ノ路線ナレバ前取扱人中村亀太ハ取扱人任命以来常ニ関係部落民ト相図リ自ラ監督トナリ山道ノ整備ニ努力シツツアリタルモ大正末期ヨリ発動機船ノ使用旺盛トナリ交通容易ナラサル陸路ノ交通ハ昔日ノ影ヲ絶ヘ道路ハ益々荒廃スルノ一方ナリシヲ憂ヒ長男一男と共ニ之カ荒廃防止ニ努メ殊ニ本路線ハ隣村岩尾、雄冬、間ノ郵便逓送路ニシテ之ヲ杜絶スルガ如キコトアラバ岩尾、雄冬ノ部落民ニ申訳ナシトシテ逓送路ヲ開ク為メ或ル時ハ吹雪ノタメ死ニ直面セルコトアリ為ニ右両部落民ハ常ニ感謝シ居リ駅逓所ノ使命ニ懸命ノ努力ス

現取扱人中村一男ハ父亀太ト共ニ克ク其ノ使命ニ基キ駅逓業務ニ精励シ本駅逓所附近ハ観光地帯ナルヲ以テ夏期ノ登山者冬ハ暑寒岳ノスキー客等ヲ家内シ地方的ニ与ヘタル利便尠シトセズ

右両人共表面上ニハ特ニ記スヘキ公職ニ就カサルモ村の重立者トシテ部落発展ニ貢献スル

所大ナリ

性行

中村亀太ハ平素寡言ニシテ温厚義侠心ニ富素行良

中村一男ハ右亀太ノ長男トシテ生マレ性質極メテ温順ニシテ素行良

二、駅逓業務上ノ設備及附属用地成功ニ要シタル費用詳細ナル調査不能ニ付其ノ概算左ノ如シ

設備物件

什器（三十人前一人前平均八円）弐百四拾円

寝具類（内譚左ノ通リ）　六百拾弐円五拾銭

夜具（十五人前一人平均弐拾五円）参百七十五円

丹前（十五人前一人平均拾円）百五十円

丹前下（二十五人前一人平均弐円）五拾円

敷布（二十五人前一人平均一円五十銭）参百十七円五十銭

附属畑地ノ成功費用ハ自力ニテ為シタルニ付

計上セズ

三、附属放牧成功状況

本駅逓所ニハ放牧地ノ設置ナシ

四、未成功ニ関シテハ未成功ニ終リタル理由

附属畑地ハ全地成墾スベキ処本地ハ添附図面ノ(1)ノ六百七拾壱坪以外ハ其殆ント急傾斜及岩石、深澤等ニシテ主ニ岩石多ク墾成出来得

サル状態ノモノナリ

(1)ノ六百七拾壱坪及敷地ハ建物ヲ除キ成墾済

五、附属用地、駅舎其ノ他附属物件ノ品目及評価格

品目	数量	単価	金額	摘要
附属敷地	九八〇坪	〇〇五	四九	本地八山中ニシテ殆ンド価値ナキ外付評価モ低廉ナリ
附属畑地	四六一〇坪	〇〇五	二三〇	殆ント利用価値ナシ
駅舎	二五坪	五〇	一、二五〇	

右ノ通リ元ブヨシ駅逓所評価

昭和十六年十月四日

増毛町評価員　助役　○○○○

廃止駅逓所官設物件附與願

私儀

元ブヨシ駅逓所取扱人ヲ被命居候処昭和

十六年六月二十一日限廃止相成其ノ間保

管仕候官設物件左記ノ通何卒特別ノ恩典

ニ依リ無償附與相成度此段奉願候也

昭和十六年八月三十日

増毛郡増毛町別苅村ブヨシ

元ブヨシ駅逓取扱人

中村一男　印

北海道廳長官戸塚九一郎殿

LIFE C 161

5

A3

ブヨシ駅逓所私費調書

一、金貳百四拾円

一、金參百七拾五円

一、金五拾円

一、金百五拾円

一、金參拾七円五拾錢

計八百五拾貳円五拾錢也

右ノ通報告候也

昭和十六年八月三十日

増毛郡増毛町字別苅村ブヨシ

元ブヨシ駅逓所取扱人

中村一男 印

A2

記

一、敷地 參反貳畝貳拾歩（九百八拾坪）

二、畑地 參町五反參畝貳拾歩（四千六百拾坪）

三、雑家建 建坪 貳拾五坪

延 參拾 坪

LIFE C161

昭和十六年　月　日

昭和六年五月拾貳日

土木部長

総務部長

件名

留萌支廳管内ブヨシ駅逓所ハ左記事由ニ依リ存知ノ必要無之○○○○候ニ付廃止致度候条附附属物件ノ公用賤産用途廃止手続御取計相成度

追テ本件附属物件ハ現取扱人ニ対シ無償付與ノ見込ニ有之候条申添候

一、廃止事由

本駅逓所ハ明治二十八年九月ノ創設ニ係リ準地方費道礼幌留萌線沿ニ位置ス

創設当時ハ石狩支廳管内ト留萌支廳管内沿岸漁村ヲ通スル唯一の路線ニシテ通行者多ク本駅逓所モ盛ニ利用セラレタルモ大正末期ヨリ沖合漁業乃海運ノ発達ニ伴ヒ海上交通ヲ主トスルニ至リ陸路ノ交通ハ其ノ跡ヲ絶チ冬期間ニ於テノミ偶ニ部落民ノ通行アルモ駅逓所ヲ利用スルモノ殆トナキ状態ニシテ其ノ利用状況ニ鑑ミ存置ノ必要ナキニ至レリ

十五年宿泊人員三人

継立ナシ

二、用途廃止スヘキ物件

雑屋建	二十二坪	
敷地	五五九〇坪	

池井

一ケ所

A01

件名　元ブヨシ駅逓所附属物件無償付與処分ノ件

指令案

已道第　号指令

増毛郡増毛町大字別刈村字ブヨシ
元ブヨシ駅逓取扱人
中村一男

昭和十六年八月三十日願元ブヨシ駅逓所附属物件
左記ノ通無償附與の件許可ス

昭和十六年　月　日

北海道庁長官

記

増毛郡増毛町大字別刈村字ブヨシ千六百参拾七番地

一、原野　壱町五反参畝貳拾歩

増毛郡増毛町大字別刈村字ブヨシ千六百参拾八番地

一、原野　参反貳畝貳拾歩

一、駅舎　木造二階建　建坪貳拾五坪七五

亜鉛引鉄板葺　建坪参拾坪　二五

案ノ二

己道　号

昭和十六年　月　日

内務大臣宛

北海道庁長官

件名

昭和十六年六月五日北会第五五号ヲ以テ公用財産用途廃止ノ件御認可相成候ブヨシ駅逓所附属物件八明治三十六年三月勅令第二十二号ニ依リ本日左記ノ通元取扱人ヘ無償付與処分致候條右報告候也

一、駅逓取扱人ノ住所氏名

増毛郡増毛町大字別苅字ブヨシ

中村一男

二、駅逓所ノ所在

同右

三、勤務年数

自大正十一年四月十九日

至昭和十六年六月三十日　十九年二ケ月

昭和十一年六月九日前取扱人中村亀太

死亡ニ付中村一男相続引続キ取扱人タリ

LIFE C 161

四、功労顕著ナリト認メタル事由

本駅逓所ハ明治二十八年九月三十日ノ創設ニ係リ人馬継立及宿屋ヲ業態トセリ。

本取扱人中村一男ハ昭和十一年六月九日、前取扱人中村亀太死亡ニ依リ業務ヲ相続引続キ取扱人トナルモノトス。

中村亀太ハ前任者ノ後ヲ享ケ大正十一年四月十九日取扱人ヲ嘱託セラレタルモノニシテ父子ニ代ヲ通シ十九年ニケ月ニ亘リ本駅逓所ニ在勤シ誠実業務ニ精励シタルモノトス。

本駅逓所ハ増毛山道ノ最高位ニ在リテ道路頗ル険峻、人馬ノ交通容易ナラサル処ナリシモ沿岸漁村ヲ通スル唯一ノ路線ナルヲ以テ取扱人ハ常ニ関係部落民ト相謀リ率先道路ノ整備ニ努メ其ノ交通ノ安全ヲ図リタリ。

殊ニ大正末期ヨリ発動機船ノ発達ニ依リ陸路ノ交通昔日ノ影ヲ没シ荒廃セントシタル道路ノ維持ニ献身的ノ努力ヲ為シ冬期間ノ如キ積雪ト吹雪ニ身命を賭シテ本駅逓所ノ便命ヲ遂行セラレタルハ洵ニ顕著ナル功績トシテ認メラル。

五、付與物件ノ品目数量及価格

雑屋建	敷地	五五九〇坪	七五円五〇〇
		二五〇坪	一、八九八円三六〇

案ノ三

己道　号

昭和十六年　月　日

土木部長

留萌支庁長

件名

九月二十九日親土第一号ヲ以テ上申相成候元ブヨシ駅逓所附属物件ハ本日別紙ノ通付與許可相成候

條指令書交付相成度

起案理由

元ブヨシ駅逓所ハ昭和十六年六月三十日限リ廃止シタル処附属物件ノ無償付與ニ関シ元取扱人ヨリ別紙ノ通願出アリタルヲ以テ調査シタル処明治参拾六年三月勅命第二十二号ニ該当シ付與スル毛支障無之認メラレ候ニ付前案ニ依リ付與処分致度

B-1

親展

親士第一号

昭和拾六年參月拾日

留萌支庁長

北海道庁長官戸塚九一郎殿

田中耕輔

駅逓廃止ニ于スル件

管下ブヨシ駅逓所ハ当管内最古ノ創設ニ係リ明治二十八年九月三十日業務開始シ今日ニ及居候処本駅逓所ノ街道筋ハ準地方費道札幌留萌線ニシテ創設当時ハ右狩支庁管内ト留萌支庁管内沿岸漁村ヲ通スル唯一ノ路線ニ有之候然ルニ大正末期ヨリ沖合漁業乃運輸業ノ発達ニ伴ヒ動力船ノ使用遂次旺盛トナリタルタメニ陸路ノ交通ハ其ノ影ヲ絶ヘ只冬期間ノミ偶ニ雄冬住民ノ通行アルノミニシテ夫レトテ駅逓所ヲ利用スルモノナキ現況ニシテ已ニ駅逓所本来ノ使命ヲ果シタルモノト思料セラレ廃止適当ト被認候條駅逓所規則取扱人手続第三條ニ則リ及稟申候也。

記

一、附属用地成ノ有無

本駅逓所ニハ放牧地ノ設置ナク附属畑地一町五反三畝二十歩ノ用地有之規定ニ依ル墾成完了ス

二、警察署長ノ意見

管轄増毛警察署長ハ廃止ニ対スル反対意見有之候モ駅逓所廃止ト共ニ建物モ同時ニ取毀相成候モノト思料シタル結果ノモノト被認候ニ付此点御了知相成度候。

尚建物ニ付テハ町当局ハ町有志トモ相談ノ上従来通リ郵便取扱所及休憩所ニ充テルベク之ヲ購入スル様申居候間為念申添候。

昭和十六年十月二十六日
己増保第一八四〇号

増毛警察署長

留萌支庁長殿

元駅逓所取扱人調査ニ関スル件

本日二十四日付紀土第一号ヲ以テ中村亀太ニ対シ標記ノ件御来照有之調査スルニ左記ノ通候條比段及回答候也

記

一、該人ニ対スル性行ハ豪救磊落ニシテ批難スルモノナシ。

二、取扱人在残中ハ該人ニ得ザレバ出来得サルモノトシテ常ニ道路ノ修繕草刈其他交通開拓ニ自ラ盡悴セラレタル為メ本日別苅ブヨシ岡ノ山道巾員ヲ保ツ居ルト一般民ノ賞賛ナリ。

事実通行〇〇スルニ相違ナクブヨシ岩尾岡ノ山道ハ細路トナリ草木甚シク道路ニ在テモ形ノミヲ見受ケラル。

該人ニ対スル受賞ヲ知ルモノナシ

三、該人ハ大正十一年前住者ヨリ引継昭和十一年六月九日死亡セルモノナルガ山岡ニ居ル為メ死亡間際ノ医療ヲ受ケ〇世間ニ於テハ〇〇手当ヲ受ケズ死シタルモノト惜シマル

昭和十六年十月二十六日

己増保第一八四〇号

増毛警察署長

留萌支庁長殿

元駅逓所取扱人調査ニ関スル件

本日二十四日付紀士第一号ヲ以テ中村一男ニ対スル標記ノ件御来照有之調査スルニ左記ノ通ニ候條比段及回答候也

記

一、該人ハ温順、〇実〇ニシテ責任感念ノ強キモノナリ。

二、昭和十一年六月ヨリ昭和十五年八月迄亡夫亀太ノ跡ヲ承ギ駅逓並ニ郵便逓送ヲ勤メタルニ該人ニ非ザレバ斯ク事故ナク欠勤スル事ナク〇〇〇ノ出〇ニ被害ナク盡瘁スル ハ賞賛ノ価アルモノト評セラル。

三、実父亀太ノ意志ヲ継ギ通行人ニ便ヲ與ヘ特筆スル点ナシ従テ受賞セルモノナシ。

以上

LIFE C 161